



J・ロビンソン作

松野正子訳

『思い出のマーニー』

上・下

(岩波少年文庫)

近藤伊津子

この物語は一九六七年に書かれ、一九八〇年には翻訳されたもので、やや旧聞に属するかもしれない。昨春、娘が中学に入った頃、娘の友人の少女たちとこの物語を読みはじめてみた。

月に一度、土曜の夜、それぞれの母の手作りのケーキ持ち寄りでお茶を飲みながら、夜の更けるのも忘れ、集い、本を閉じたのは一年経った六月であった。

あまりの緩慢さにあきれながらも、三十七章の各々を、ある時は輪読し、少女たちの涼やかな声音に酔いしれ、あるいは、内なる自分の姿を主人公と共に凝視し、ふと上げる面差しの輝きに息を呑み、十か月、物語と共に旅をしたのであった。

○

三人の少女たちは、イギリスの都ロンドンから「ふつうの」顔をして一人つきりで列車に乗った主人公アンナと共に旅立った。

少女たちはアンナより二つ三つ年嵩であろうか。

少女たちの旅先は、海っぺたの田舎町、ノーフォークのペグおばさん家と、しめっ地やしきに続く舟つき場と、入江の浜辺だった。

アンナは牧草のはえた草原と畑の広がるリトル・オーバートン、草花の咲く低い門の家に留まることになり、＼あたたかくて、あまく、古めかしい、なつかしいにおいのする部屋＼に落ち着く。

主人公アンナは、肉身との死別に続く不運のあと、施設そして里子に出された。里親は＼なんにも考えずにいる＼＼やってみようともしない＼アンナに困惑の果て、田舎の転地への旅となったわけである。

物語は、はじめに、このあたたかい、甘い、古めかしい、懐かしい匂いが、アンナの中に、少しずつ浸入していくこと、そして、この匂いこそ、この少女の今回の旅路の全容を暗示するものであることを告げている。

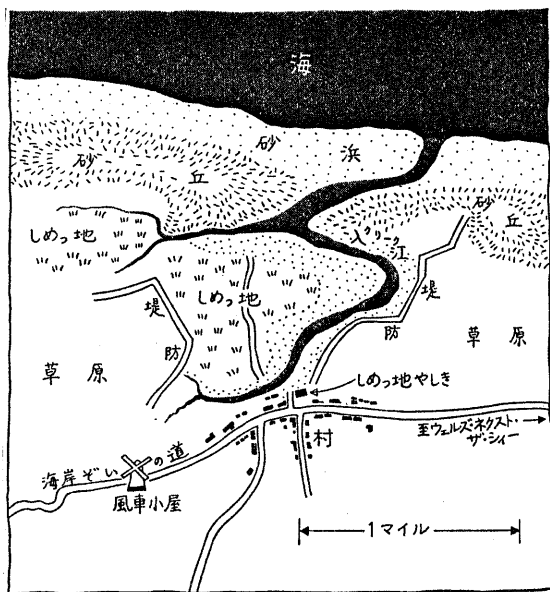
ペグさん夫妻のぬくもりのある言葉でくつろぎ、

舟つき場に足を進めた少女たちは、そこで、後にアンナと深く関わり、旅を滑らかに進行させていく一家と出逢うが、少女たちは、それとは気付かない。

入江に面した屋敷は＼自分がずっと探していたような：自分が来るのを待っていたような＼雰囲気は漂わせ、アンナを誘う。＼だれかに見つめられているという、おかしな感じ＼があり、やがて屋敷の住人の少女マーニーと近づく。アンナの持たざるもの全てを持つマーニーであった。やがて、アンナは、置きざりにした肉身を罵り、養い親への猜疑心をマーニーに披瀝する。声はかすれ、涙を流しながら。

少女Aはこの時、病死した父に思いを馳せ、頭を垂れ、泣いた。「大きくなって泣いたの初めて」という。マーニーは＼アンナ、わたしのアンナ、わたしはあなたを愛しているわ。今まで会ったどの女の子よりもあなたが好き＼アンナは気分がよくなり、心の重しを取り去られる。

アンナのマーニーによる浄化、そしてマーニーに



受容され、物語は後半へと続く。

風車小屋での事件を契機に、アンナはマーニーと決別するが、和解する。

しかし、満ち潮の中で、アンナは溺れかかり病床に就くことになる。

病床で、アンナは自らの変容に気づいていくが、

久々の外出、春は過ぎ、夏の訪れと共に、何もかも、病氣以前とは違ったものを感じる。そして、しめっ地やしきの表側を初めて見ることで、このアンナを引きつけて止まない屋敷の全貌を知る。これは、内(裏)なるところに籠るアンナから外(表)の世界へと転換していく舞台の転回である。

物語の初めに一瞬出会ったリンゼー家の人びとの再会、しめっ地やしきを画布に描く老婦人ギリとの交流、そして、再び彼らから受容され、信頼と愛の絆を結び、アンナの変容めざましく、物語はめくるめき終りに近づく。

春から夏の終りまでの半年の物語は、思いがけない登場人物たちの環状の繋がりを語り、めでたく大団円となる。

共に旅した少女Aは「初めのアンナには半分共感した。次第にアンナの成長と共に重なっていく自分を感じた。おしまいのアンナはすてき。」という。

少女Bは「アンナの成長についていけなかった。初めのまゝのアンナに今も最も近い自分を感じる。」という。

少女Cは「自分とそっくりの人としか話せなかったアンナが、違う人たちと微笑みあうことができるようになった時うれしかった。わたしもそうだった

から。私もこの一年であまり知らない人たちとも近づいて話してみたいと思うようになった。」という。

読み手の少女たちは、アンナと共に旋律を奏でる者として旅をした。少女たちの、この先、たゆとう旅は幾たりも遍路をめぐるに違いない。

(かっこう文庫主宰)

岸田 麗子著
『父 岸田 劉生』

(中公文庫)

皆川 美恵子

